

もう一度子どもと家畜をつなげるために ～里山の家畜「ヤギ」の飼育実践から見えたこと～

森と木のクリエイター科 森林環境教育専攻 葭田 周作

1. 研究背景

私は子どもの頃から家畜の世話が大好きで、自宅や小学校でニワトリやウサギの世話をしていた。家畜の世話は心の寄りどころだった。実習で保育園や小学校を訪れた際、ショッキングな光景に出会った。空の飼育小屋だ。調べたところ、平成 19 年に 79% だった「小学校での家畜飼育」が令和 4 年には 21% まで減少していることが判明した。

一方で、文部科学省が定める「小学校学習指導要領」には、動物飼育を通して「生命への関心」や「命の存在に気が付き、生き物に親しみをもつこと」が目標として掲げられているが、この学びを保証できていない現状がある。このままでは、子どもたちの成長に影響があるのではないだろうか。もう一度子どもと家畜をつなぎたいと思った。

2. 目的

自らが家畜を飼育することで飼育の苦勞や課題、子どもたちの反応など家畜飼育のメリット・デメリットを肌で感じ、そこから見えてきたことをもとに、もう一度子どもと家畜をつなぐための方法を提案していくことを研究の目的とした。

本研究では「ヤギ」を飼育することにした。

3. 研究の流れ

研究は次の流れで実施した。

1. ヤギの飼育に向けた基礎調査
2. 実践とそこから見えたこと
3. まとめと提案

4. ヤギの飼育に向けた基礎調査

基礎調査は以下の流れで行った。

1. ヤギの基礎知識を学ぶ（本、ネット）
2. ヤギを選ぶ際の条件決定
「子どもとつなぐ」ことを考慮して条件を決定。
① 小ぶり ② 穏やかな性格 ③ メス
④ 二頭以上（ストレス予防） ⑤ 2～5 歳 ⑥ 在来種
3. 入手先探し
4. 飼育や設備、手入れの方法を飼育者から教わる
5. 干し草や獣医探し
6. 家畜衛生管理基準と登録について学ぶ
7. 飼育場づくりの予定立て

希望のヤギがなかなか見つからず苦戦したが、友人の紹介で条件を全てクリアする「さくら」と「もも」の双子の姉妹をレンタルで迎え入れることになった。

5. 飼育準備

アカデミーでの 2 年間の学びを生かした実践として

飼育準備の作業を以下の流れで行った。

- ① パーマカルチャーの視点でサイト決め
- ② 毒草を確認&除去するための植生観察
- ③ 風通しを良くしたりなどの環境整備
- ④ 小屋を建てるための廃材を集めて分類。
- ⑤ 小屋づくり&フェンス張り
- ⑥ ヤギの移動用トレイづくり

予想より費用がかかった。また格好つけたがりの私は、相談したり、頼ったり、報告したりできず、やり直しになることばかりだった。飼育準備を通し、これまでフタをしてきた「自分」を見つめる日々となった。

6. 飼育

飼育実践を通して気づいたことが沢山あった。

・「毎日の世話」から学んだこと

規則正しいリズムで家畜の世話をを行うことの重要性を感じ、毎朝 7 時半からの世話を開始した。自分の甘さから寝坊が多くなり、ヤギに可哀想な日々が続いた。そんな自分でもヤギが頼ってくれる姿を見て少しずつ責任感が芽生え、遅れが生じながらも規則正しいリズムで世話を続けるようになった。家畜は人間を更生させる力を持つのではないかと感じた。

・「信頼関係の構築」から学んだこと

子どもたちと一緒に歩けるように、ドイツで学んだ「家畜との関わり方」を活かして信頼関係を築く練習を始めた。その結果、今では後ろをついて歩くようになり、言葉以外のコミュニケーションで心が通じ合えたことに嬉しさと自信を感じた。力や罰でなく、お互いの気持ちを寄せる方法は、保育で幼児と向き合う際にも通じるものがあると感じた。

・「ヤギの看病」から学んだこと

さくらが食べたものを吐き、私は動物病院に処置方法を電話で指示してもらい対応した。言葉が通じない

中で命を見守る難しさと、命の大切さを実感する貴重な機会となった。

・「脱走」から学んだこと

多くの方の協力で無事に発見されたが、その後の脱走対策で自分の悪いクセが再発した。やり方が分からないまま知ったかぶりをし、助けを求められなかったため、最終的に先生が他の学生と共に対応してくれた。この経験を通じて、家畜の飼育が自分を映し出す鏡のようであることを痛感した。

・「不在時の世話」から学んだこと

体調が悪い時や長期不在時には、誰かに世話をお願いする必要があった。しかし、人に頼むことが苦手だった私は、クラブを作ることができず、11月になってようやく飼育を頼める仲間ができた。この経験を通じて、人に頼むことが少しずつできるようになったと感じている。家畜飼育は、自分の苦手な部分を成長させてくれる力があると感じた。

7. 子どもたちの反応



写真1 ヤギと触れ合う子どもたち

子どもたちの反応から様々な効果を再確認し子どもとヤギをもう一度つなぐ必要性を痛感した。

・好奇心や興味を引き出す「やってみたい！」の連鎖

「散歩に行きたい！」「餌を集めてきたい！」など「やりたい！」のフタがどんどん開

いていった。さらに、

「どの草が好きなんだろう？」「夜はどうしてるんだろう？」など疑問や知りたいことがどんどん出てきてそれを確かめるために主体的に行動を始めた。

・頼られることで自己肯定感が高まる

子どもたちは自分と同じくらい大きさのヤギに頼られ必要とされることで、自信がついたり、自己肯定感が高まったりしているようだった。そして、綺麗な小屋で寝かせてあげたい、美味しい餌を食べさせてあげたい、など思いやりの心も自然に育まれているのかもしれない。

・子どもと子どもをつなぐ接着剤

知らない子ども同士が出会っても、ヤギのお世話を一緒にするといつの間にか友だち同士になってしまう光景を何度も見た。ヤギは、コミュニケーションが苦手な子ども同士をサポートしてくれていた。

・癒しとゆるやかな時間を与える

子どもたちは何かとヤギの周りに集まっていた。子どもたちに安心と癒しをたっぷりと与えていた。

8. まとめと提案

ヤギをはじめとする家畜がもたらす子どもたちへのメリットは非常に大きいということが実践の中で改めて確認できた。こうしたことから、やはり子どもと家畜をつなげるべきであると改めて感じた。

その一方で、昔のように小学校でこれらの家畜を飼育することは小学校の現状を考慮すると、ハードルが高いということも実践してみて改めて分かった。

そこで、もう一度子どもたちと家畜をつなぐために3つの方法を提案したい。

提案①「地域一体型で飼育」

美濃加茂市立三和小学校で実践している方法で、地域と学校が一丸となり家畜を飼育する。平日は学校で、休日は地域の牧場でヤギの世話をを行う。文部科学省が推奨するコミュニティスクール構想の理想型でもあるが、地域に施設や人材が必要で、地域の理解と協力体制、調整役、維持費が必要だ。

提案②「ユース・ファーム」

ドイツをはじめとするヨーロッパ各地で50年以上実践されているもの。子どもたちが家畜や畑、伝統的な技術、自由な遊びを体験できる総合施設。小学生から大学生



写真2 ドイツで見たユースファーム

まで利用し、命の教育や食育、自然とのつながりなど様々な学びを体験できる。運営費は行政予算や寄付金、ワークショップで賄われている。

学校は施設を利用するだけで済み、放課後は子どもたちが自由に家畜の世話や遊び、暮らしの技術を体験できる。施設の設定・維持管理費用が必要。

提案③「家畜と暮らしを体験する里山宿泊合宿」

既存の林間学校や宿泊学習をアレンジした「暮らしを体験する里山宿泊合宿」。兵庫県では、全校5年生を対象に4泊5日の自然体験合宿が実施されている。家畜の世話や田畑作業、林業、暮らしの技術を体験する「里山学校」のイメージ。

学校が既存の宿泊合宿を活用でき、兵庫県での前例があるため始めやすい。学校は利用するだけで、命の教育や食育、生きる力を実際に体験できる。提案②のユースファームを廃校やキャンプ場、公園などの遊休施設を有効活用して設立して展開する方法もある。第一次産業の重要性を次世代に広く伝えることができ。課題としては、行政の理解と予算、農・林・教育の異なる部署の連携が必要だ。

地域や学校によってそれぞれ状況は違うが、このうちのどれか一つでも実現させることができれば、もう一度、子どもたちと家畜がつながるはずだ。